九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ネパールの低開発と知識人 : D.B. ビスタ氏『運命論と開発 : 近代化にむけたネパールの闘い』をめぐって

小林, 茂
九州大学比較社会文化研究科日本社会文化専攻・基層構造講座

https://doi.org/10.15017/8604

出版情報：比較社会文化. 4, pp.49-64, 1998-02-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『比較社会文化』第4巻（1998）49～64頁
Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
vol. 4 (1998), pp. 49～64

ネパールの低開発と知識人：D.B.ビスタ氏『運命論と開発：近代化にむけたネパールの闘い』をめぐって

A Discussion on the Causes of Underdevelopment in Nepal with Reference to D. B. Bista's *Fatalism and Development: Nepal's Struggle for Modernization* (1991)

小　林　　茂*
Shigeru KOBAYASHI

Keywords: Underdevelopment, Modernization, Fatalism, Intellectuals, Nepal

Abstract: A book written by the Nepali anthropologist, Dor Bahadur Bista, *Fatalism and Development* (1991), has provoked a heated debate on the causes of Nepal's underdevelopment among intellectuals and foreigners who have been concerned about the future of the country. In this book Bista tried to explain Nepal's problems from a sociocultural viewpoint and attributed their causes to the Hinduistic ethic. He insisted that the Hindu high castes, who have long dominated Nepalese society, share a fatalistic belief which undermines personal responsibility and hinders the development of achievement motivation. Institutionalized sycophancy (*chakari*) and favoritism for *aphno manche* (one's own people), which are rampant among bureaucrats, are associated with these attitudes. Bista argued that the majority of intellectuals in Nepal, who should be responsible for the development of the country, are lacking in the sense of responsibility and public spirit indispensable for the progress.

Surveying briefly opinions about Bista's book, it is remarkable how clearly they are divided. Most of the supporters are foreigners, while criticisms are from natives, especially Hindu high castes. For foreigners, Bista's book is not only a native's systematic explanation of underdevelopment but also an articulation of their feelings about the attitudes of Nepalese people, and those of intellectuals in particular. On the other hand, for other critics, the book does make unreasonable accusations against the culture and society of Nepal. A typical counterargument is that habits like *chakari* and favoritism are not limited to Nepal and to ascribe them to a Hinduistic ethic is not acceptable. Some critics accuse Bista of trying to replace native culture, which is the base of identity, with 'successful cultures' such as Western and Japanese. One critic argues that high castes who are playing leading roles in the society have a working spirit which is comparable with the protestant ethic, in sharp contrast to Bista's suggestions. At the same time, supporters of Bista's book can be found among ethnic minorities in Nepal. This fact indicates that there is a chasm between Hindu high castes and ethnic minorities in evaluating Bista's book. Concerning this point, it should be noted that Bista admires the latter's ethics, feeling them to be closer to the protestant values.

Examining Bista's argument on bureaucracy in Nepal, we can find that it is rather orthodox in spite of its appearance. It is an analysis that takes account of the scholarship since Rose and Fisher's *The Politics of Nepal* (1970), which elucidated the main features of the bureaucracy. Therefore the heated debate on his book is mainly explained by Bista's insistence that the attitudes of bureaucrats and elites in Nepal are based on a Hinduistic ethic which dominant Hindu high castes nurtured for a long time. As the majority of them are from these castes, they feel themselves to be accused directly of causing underdevelopment.

＊日本社会文化専攻・基層構造講座
Department of the Basic Structure of Human Societies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University, Fukuoka 810-8560, Japan

Although the theme of Bista's book is development, it would be difficult to realize his suggestions with regard to the actual policy and foreign assistance. It should be also noticed that it will take some time until its influence will spread to the common people in Nepal, because Bista's book is written in English. But this book will probably have an influence to the movements of ethnic minorities, which have become an issue since the democratization in 1990. Bista criticized the dominance of Hindu high castes and ascribed the underdevelopment of the country to them. This book will provide also a framework for researchers of entrepreneurial activities of the various ethnic groups who give attention to their working ethic. In these respects, we should trace how this provocative book is read in cultural and social change in Nepal.

はじめに

伝統社会の近代化にむけた変化を考えるに際して，近代的科学技術の導入やそれにもとづいた産業化，生産性の上昇といった側面だけでなく，同時に社会や制度，さらには人びとの文化や習慣，世界観や考え方が重要な意味をもつことは，あらためて指摘するまでもない．マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の〈精神〉」［ウェーバー，1965］は，資本主義の発展において，人びとの倫理観が大きな役割をはたすことを示した古典的な例であるが，近年経済発展のいちじるしい東アジア・東南アジアの一部についても，そうした側面の検討がはじめられている［たとえばヴォーゲル，1993］．

ネパールの社会は，現在も伝統的色彩がつよく，世界では最貧国に位置づけられ，近代化の達成への道はなおとおいといってよい．このために，開発をどうすすめるかについては，政府をはじめとするネパールの関係機関だけでなく，援助諸国や国際援助機関からも大きな関心がよせられている．しかしこの場合，今後の開発だけでなく，同時にこうした現状の背景を，社会や制度，文化にわたって検討しておくことは意義あることであろう．

ネパールの近代化は，他の国と比較しておそく開始されたとはいえ，開国以来すでに50年ちかくが経過している．その間，開発にはすくなからぬ努力がむけられたにもかかわらず，自力による持続的発展は，軌道にのっていない．開発は依然としてスムースにすすまず，むしろ援助依存体質が一層つよまっている，というのが一般的な認識である．こうした，低開発状態の継続とでもいうべき状況をどう理解するかは，それ自体として大きな課題であるが，この要因の一部として，ネパールの社会や制度，文化がある，というのは，大方のみかたであるといってよい［たとえばKhadka, 1991, pp. 10-16: Cohen, 1992］．

D.B.ビスタ氏の『運命論と開発：近代化にむけたネパールの闘い』［Bista, 1991］（以下『運命論』と略称）は，こうした側面についての，ネパール人による，はじめてのまとまった論考である．この書物は，出版以後大きな反響をよび，開発や経済発展と社会や文化との関係について，多くの人びとが関心をよせていることがうかがえる．

もうひとつ注目されるのは，この書物に対する評価が大きく分裂していることであろう．書評［Macfarlane, 1990; Dahal, 1990; Pahari, 1992; de Sales, 1992］だけでなく，それらに対する意見（投書）においても，この書物をたかく評価するものと，はげしく批判するものとに明確にわかれているのである．

評価の分裂は，これにとどまらない．ネパール政府高官やビジネスマンの出席しているあるパーティーで，筆者が『運命論』を話題にしたところ，こうした場所でその話をするのは望ましくないと，相手（スリランカ人）にさしとめられたことがある．ネパールの現体制を構成する知識人のあいだでは，この書物は禁句にさえなっているわけである．これに対し，在ネパールＵＮＤＰ（国連開発計画）など国際援助機関では，この書物の輪読会やビスタ氏当人をまねいての討論会もおこなわれたという．援助関係者のあいだで，この書物が共鳴をよんだことがうかがえる．

本書の評価をめぐるこのような分裂は，低開発の要因としてのネパールの社会・文化について，するどく対立する見方のあることを，あらわにしたといってもよい．後述するように『運命論』の分析は，ネパールの社会を今なお強固に支配しているカースト制度やヒンズー教的イデオロギーの役割に集中している．それからすればこの分裂は，カースト制度やヒンズー教的イデオロギーと開発との関係をどう考えるかをめぐる分裂でもある．『運命論』で，これらがネガティブにあつかわれていることはいうまでもないが，それがこの書物への反発をよぶことは容易に想像できよう．『運命論』は，法律や制度だけでは規制できないような，社会のホンネの部分に分析と批判をくわえているのである．

本稿では，こうした『運命論』を紹介し，それに対する各種の反応を分析しながら，ネパールの低開発の要因としての社会・文化に対する知識人の見方，さらにはそうした見方の背景を検討してみることにしたい．これによって，カースト制度やヒンズー教的イデオロギーという伝統が今日はたしている役割について，ネパールの知識人がどのように考えているか，一定の展望を示すことができるであろう．またネパールの知識人が，伝統に対する態度という点

で，どのような特色をもっているかについても，ひとつの見方を提供できると考えられる．

くわえて『運命論』は，ネパール政府の官僚制の特色を，カースト制度やヒンズー教的イデオロギーとの関係のなかでとらえようとしている．ここでは，関心を官僚制にまでひろげ，『運命論』を中心に，その特異性の文化論的認識がどのように展開してきたかについても追跡したい．これによって，『運命論』が過去の研究をふまえて書かれたものであることが明確になるだけでなく，そのよってたつ立場についても，一層の理解がすすむと考えられる．

以下では，まずネパールの低開発の持続に関する多彩な議論を検討し，つづいてビスタ氏の経歴と『運命論』の内容，さらにそれに対する論評を紹介する．これをふまえ，ネパールの官僚制に関する従来の研究の成果を示しつつ，『運命論』がこれらをふまえたものであることをあきらかにし，その評価がわかれる背景を検討する．

なお本稿は，『運命論』における分析や評価の当否を検討するものではないことをあらかじめことわっておきたい．むしろ，『運命論』をめぐる評価があらわにした，ネパールの低開発理解を検討し，その特色を理解することにつとめたい．

1．低開発論の諸相

ネパールの低開発を社会的文化的側面から理解するものとして『運命論』が書かれたとすれば，その紹介に直接はいるまえに，まず類似の議論を検討しておかねばならない．イギリスの人類学者，マクファーレンは，『運命論』に対する好意的書評［Macfarlane, 1990］[1]のなかで，ネパールの低開発に関連する議論として，ふたつの傾向があるとしている．

そのひとつは，人口学的・生態学的・地理的説明とよんでよいもので，ネパールのけわしい地形，困難な交通，すくない農地や鉱物資源といった，地理的条件をまず重視する．そうした場所にコントロールの困難な人口増加が発生し，森林をはじめとする資源を消耗させ，結果として生態学的危機をまねいている，とされることになる．

ネパールの山岳地帯や丘陵地帯（Pahar）を旅行してみると，この議論が説得力をもつものであることが実感できる．谷底から稜線付近まで，急斜面上に棚田や段畑がひらかれ，本来そこにあったはずの森林が，わずかしかのこっていないという景観は，上記のプロセスが限界ちかくまですすんでいることをうかがわせる．ただしこの場合，地理的条件だけで低開発を理解することには，大きな危険がともなうことに，留意しておくべきであろう．おなじように内陸の，しかも山岳地帯に立地する国でも高度な発展をとげているケースがある（たとえばヨーロッパの山岳諸国）．またなによりも，こうした考え方では，開発の可能性までも否定してしまうことになりかねない．

もうひとつは，政治経済学的説明といえるようなもので，イギリスの地理学者，ブレーキーらの『危機のなかのネパール：周辺における成長と停滞』［Blaikie *et al.*, 1980］が代表となる．そこでは，上記にくわえ，「従属理論」［アミン，1983など］を適用し，低開発の原因が検討される．世界資本主義の〈周辺〉としての南アジア，さらにその〈周辺〉としてのネパールという構図が設定され，南アジアの〈中心〉，インドに従属するネパールという側面が強調されることになる．

オープン・ボーダーという，ヒト・モノいずれもが通過しやすい国境をこえてインドの影響がネパールにおよび，その大量生産品の流入とともに，織布・金属加工・皮革製品などに関する伝統的手工業が消滅していく過程が示される．また，人口の増加とともに余剰食料がすくなくなった農村部では，商品生産が発展せず，現金収入の不足分は，グルカ兵勤務による送金，年金といった農外収入でおぎなわれるという状況もえがきだされる．

本書でもうひとつ注目されるのは，ネパール国内でも〈中心―周辺〉という図式が適用されることである．この場合，〈中心〉はいうまでもなく首都のカトマンズで，〈周辺〉はその他の地方となる．開発投資は〈中心〉に集中し，地方にはいきわたらない．また地方でも，都市に配置された官僚行政機構の異常ともいえる肥大化が指摘される．

以上のような状況は，「従属理論」の示す〈周辺〉の特徴によく一致するとはいえ，この理論が低開発国経済の第一の特色としてあげる，〈中心〉の需要にむすびついた「外向性」をもつ産業［アミン，1993，pp. 206-242］については，ふしぎなことに，ほとんどふれられない．『危機のなかのネパール』の執筆時点には，この種の輸出産業として特筆にあたいするものが，まだ登場していなかったとみるべきであろう．

現在のネパールでは，こうした産業として，カーペットおよび既製服製造が登場しているが，その重要性がますのはここ十数年ほどのことである．またその製品の主たる出荷先は，カーペットの場合はドイツ，既製服ではアメリカとなっており，インドではないことも注目されよう．さらにこの既製服製造は，アメリカの輸入規制をのがれるために，インドの企業家がネパールに生産地点をうつすことによりさかんになったことも留意される［Bista, K.B., 1988, pp. 27-36］．

この点からすれば，『危機のなかのネパール』にえがかれている対外的「従属」関係は，まだ形成されはじめてまもないものと考えることができよう．これは，インド・ヒマ

ラヤの場合と比較すると，さらにはっきりする．そこでは，中印国境紛争に際しての軍事用道路の関発以後，インド平原部との交通条件がよくなり，これを通じて森林・鉱物資源や水力の開発が急速にすすめられ，旧来の地域経済が大きく変化してきている．それにともない農村では，成年男子がほとんど外部（平原部の都市）にでかせぎにでて，女性・老人・子どもが主たる住民になっているとさえいわれる［Whittaker, 1984］．著名な森林資源保護運動であるチプコ運動も，外部の企業家の主導による商業的な大規模伐採に対する，地元住民，とくに女性の抗議運動として理解されている［Berreman, 1983］．ネパールの山岳・丘陵地帯の場合，これほどまでに開発と変容がすすんでいる地域はほとんどないといってよい．

もうひとつ注目されるのは，〈周辺〉としてのネパールの位置も，『危機のなかのネパール』にえがかれているものほど，単純でないという点である．カーペット製造・既製服製造いずれの場合も，インドとの複雑な関係のなかで，欧米むけの輸出産業として発展してきている[2]．これからすれば，この種の産業の発展の分析に「従属理論」を採用するにしても，単純な適用は困難なことがあきらかである．

以上，ブレーキーらの議論をみたが，〈中心―周辺〉というシェーマをあてはめるにしても，ネパールの場合は，ようやくそうした関係が本格的に形成されはじめたところといってよいであろう．その意味では，1990年の民主化以後の，経済自由化にともなうインド資本の活動の活発化がむしろ注目される．

ブレーキーらの議論については，さらにマクファーレンの別の角度からの批判［Macfarlane, 1990; 1994, pp. 113-115］もあるが，このあたりできりあげたい．

上記のような，大局的観点からする低開発論とはかなり性格がちがうが，もうひとつあげておかねばならないのは，経済発展にむすびつかない開発，さらに援助，とでもよべるような視角である．ネパールは，ラナ体制の打倒（1950―1951年）以後，国家政策として開発を最優先視してきたことはあらためて指摘するまでもない．これが，所期の成果をあげていないことは，その低い１人あたりＧＮＰ増加率［Khadka, 1991, p 346-347］からもあきらかである．また開発支出の大半が，外国援助に由来しているところからすれば［Shrestha, 1990, pp. 118-119の表を参照］，これも経済発展については，所期の成果をあげているものがすくないとみてよいであろう．ネパールへの援助とその経済発展との関係を検討した経済学者，カドカは，基本的な統計の不備もあって，援助の効果を明確に示すのは困難としながらも，それが予期された成果をあげず，かえって都市と農村の格差や，少数の富裕層と多数の貧困層との所得の格差をひろげてしまったと結論している［Khadka, 1991, pp. 336―424］．したがって，ネパールの低開発状態について議論するには，開発，さらに援助にふれずにすますことはできないのである．つぎにこれらに焦点をあててみることにしたい．

ところで，ネパールの開発・外国援助と経済発展に関連する文献はすくなくないが，それを展望するような研究や報告をまだ手にすることができない．したがって以下では，筆者がたまたまみることのできたものによって論をすすめることを，あらかじめことわっておきたい．

ネパール人エコノミスト，バンスコタは，ネパールにおける自然資源の破壊および経済発展の停滞の背景として，つぎのような問題点があることを指摘している［Banskota, 1992］．

①人口増
②開発政策の失敗
③土地所有・所得・ジェンダー・開発投資へのアクセスにおける不平等
④制度的問題
⑤オープン・ボーダーなどの対外的条件
⑥バランスを欠いた資源配分

これらのうち，開発・援助に直接的に関係するのは，②開発政策の失敗および④制度的問題で，以下これらについてみていきたい．

政策の失敗の原因としてあげられる最大のものは，開発計画が実行されていないという点である．ネパールが直面する問題についての認識のうえに，さまざまな計画がつぎからつぎへと立案されるが，それが実行にうつされても不充分にしか目標が達成されず，成果があがらないというわけである．

制度的問題としてあげられるのは，以上のような不充分な実施の背景である．政府の開発計画の立案・実施能力がそもそも不充分であるとされ，それには機構的・制度的問題が大きく関与しているということになる．具体的には，関係する役所間の連絡・調整が不充分なこと，実施にあたる職員の給与がひくすぎて，意欲に欠けること，はっきりした目標や責任が設定されておらず，組織も個人も機能を発揮していないこと，さらには貧弱な予算しか配分されず，関係者が意欲をうしなってしまうことなど，さまざまな問題点が指摘される．

こうした事態に関連して，かつては，計画そのものに批判がむけられていたというが，今日ではそれを実施する役所の機構や制度の問題が大きいと考えられているともいう．自然資源の管理について，「林業マスター・プラン（Forestry Master Plan）」のほか，「国土保全戦略（National Conservation Strategy）」さらには「国土利用計画プロジェクト（National Land Use Planning Project）」が立案

されているが，どの役所がこれらの調整をおこなうか，ということすら未決定という状態である．そしてこうした政府官僚組織であるからこそ，「ドナー（援助国・援助機関）に指導され，ひきまわされ，ささえられた（“led, driven and sustained by donors”）」援助という状況がまかりとおる事態になる，というわけである．

ネパール人エコノミストの，以上のような見方は，ドナー側にも共通する．世界銀行の報告は，ネパールの経済成長をうながす最短の道は，おそらくプロジェクトの実施状況の改善であろうとしつつ，政府のプロジェクト遂行能力のひくさについて，同様の視角から検討している［World Bank, 1992, pp. ix-x, 124-143］．これはたいへん詳細なもので，ネパールの開発やそれに対する援助の具体的状況を知るのに有用なので，さらにみておこう．

まず，計画の達成期間という点からみると，ネパールでは他の発展途上国と比較してかなり長くなっているという指摘がある．平均的には，援助プロジェクトの実施に予定される期間は4.4年，実際は延長されて6.6年（延長期間比率は50%）なのに，ネパールの場合は8年で，延長期間比率が81%にも達する．また期間延長によりふくれあがるコストは，全発展途上国の単純平均で21%なのに，ネパールでは38%にもなる．加重平均の場合は，これが49%に増加する．

当然のことながら，これはプロジェクトの経済効果にも反映し，ＥＲＲ（Economic Rates of Return）は，プロジェクトの初期段階で13%（ＬＤＣ［less developed country］では23%）なのに計画完成時には7%（ＬＤＣでは16%）にまで低下することになる．またこの場合，大きなプロジェクトの方が，効率がわるいという傾向がはっきりしている．

もうひとつの計画達成率をみる指標として，ディスバースメント（援助の実施にともなう援助資金の実際の支出）比があるが，ネパールの場合，政府側にしっかりしたデータがない，というのはおどろくべきことといえよう．これが入手できるＩＤＡ（International Development Association：国際開発協会，通称第2世界銀行）とＡＤＢ（アジア開発銀行）の融資の場合をみるだけでも，ディスバースメント比がひくいことは明確である．ＩＤＡローンの場合，この数値は88年が20.7%，89年が17.3%，90年が18.2%，91年が9.3%となっている［Shrestha, 1990, p. 94の表も参照］．

このような状況の原因はいくつかあげられるが，けわしい地形，経済環境，政治動向といった当面は解決がむつかしいものは別にしても，政府側だけで大きく3つの領域に問題点があるという．その第1は，プロジェクト実行上の問題で，このもっとも大きいものとして，まずローカル・コスト（援助に対応して政府側が負担すべき資金）の負担がある．政府開発予算は，多数のプロジェクトにうすく配分されており，個々のプロジェクトをスムースにすすめるには大きく不足し，目標が達成できなくなるわけである．これが過剰なコミットメント（援助資金の供与・うけいれの契約）の結果であることは，あらためていうまでもない．政府はその能力以上に援助をうけいれているわけである．他方，通常予算では，事業の運転・メンテナンス資金が充分に保証されておらず，プロジェクト効果がさらに低下するという結果をまねく．道路の場合でいえば，メンテナンスのおくれは交通を困難にし，車への負担を大きくするだけでなく，路面などをさらに劣化させ，補修コストの増大をまねくことになる．

これらにくわえて，予算執行のおくれがある．タイムリーな支払いができないことにより，プロジェクト遂行がとどこおるわけである．とくに財政年度末がちかづくと，政府資金が底をつき，ひどい状態になる．また支払いをモニターするシステムの不備のため，役人による横領や着服が横行して，さらに状態を悪化させることになる．担当者の配置転換が多いというのも問題で，本当に資金がプロジェクトにつかわれているかどうか確認できない場合さえあるという．

とくに援助資金の支払い規則が複雑すぎるという問題がこれに関与しているが，さらに物品や役務の調達についても問題が多い．不要な規則が多すぎて，入札等がスムースにすすまないわけである．これにくわえて，建設の場合でいえば，不適切な資材をもちいた，不充分な監督による質のわるい工事が発生することになる．ＩＤＡが資金供与をおこなったプロジェクトでは，38%もの比率で不適切な工事が発見されたというが，調達された物品や役務の質にも問題は多い．

第2の問題群は，制度的・組織的なものである．まずプロジェクト・スタッフには，経営や技術について経験のない者が多く，また上級担当者の配置転換が頻繁で仕事に継続性がなくなる．この原因としては，役人の任命が政治的配慮にもとづき，適材適所の配置になっていないこと，能力のある人材がもともとすくないこと，給与がひくすぎて優秀な人材があつまらないこと，などがあるが，いずれも計画の遂行にとっては大きな障害といえよう．

こうした人材不足は，コンサルタントの利用や研修でも一部カバーできるが，これもスムースにすすまない．コンサルタントの雇用がおくれたり，研修に出向させるスタッフがなかなかきまらなかったりするわけである．この原因として，雇用の許可に関与する役所が多いことのほか，その費用の捻出といった問題があり，人材の育成・活用という面でも障害のあることが理解できる．

第3は，公共料金の値上げのおくれ[3]，その不充分な徴収，さらにはしっかりした会計監査の欠如といった財政運用上の問題で，必要不可欠なことすら満足されていないことが示される．

以上，開発・援助における問題をみたが，このような状況からすれば，プロジェクトによっては，完成後1～2年のあいだに「消滅」してしまうようなケースも発生する背景がよく理解できるであろう．これでは，完成までに多大な期間と資金を要するだけでなく，その維持すらおぼつかないわけである．こうした状況に関連して，上記のバンスコタは，別の報告で開発プロジェクトのライフ・サイクルとでもいえるようなものを示している［Banskota, 1983］．プロジェクトの実施状況を別の角度からえがいており，やはりネパールの開発・援助の理解に有用と思われるので，紹介しておこう．

バンスコタによれば，開発プロジェクトのライフ・サイクルは，まず〈パイロット・フェーズ〉からはじまる．この段階では，さきゆきのあかるくなるような成果がでるほどに充分な資金・資材・人材がプロジェクトに投入される．その場合，これに費されたコストは公表されず，でてきた成果だけが宣伝され，政府がさらなる援助を要請する根拠とされる．

つぎは〈極端な拡大〉段階で，カトマンズのセミナーやワーク・ショップで，上記の成果がさらにひろく宣伝され，まわりの賛同があつめられる．それにあわせて計画の実行に必要な措置がとられるとともに，可能なかぎりひろい地域でのその実施が公表される，この場合，計画の問題点は不問に付され，プロジェクトに対する疑問の表明は抑制される．

しかし，プロジェクトの拡大とともに，初期ほどの資金や資材の投入は維持できなくなり，問題が顕在化してくる．くわえてプロジェクトから利益をうける人たちと，それ以外の人たちとの争いも表面化する．これが〈争いと危機〉段階である．全員のペットであったプロジェクトは，いまや目障りなものとなり，関係者の不正行為や背任行為の事実が知られはじめる．またトップの交代がつづき，誰も責任をとらなくなってしまう．

さらにこれは〈無視と停滞〉段階に移行する．官僚はプロジェクトが萎縮するにまかせ，反対派も声をひそめる．どうやらつぎのプロジェクトがはじまるらしい，というわけである．〈静かな撤退〉段階がつぎにはじまる．プロジェクトを何とかしようという努力がおこなわれず，政府はもうこれから援助をひきだすことはできないと判断し，関心を示さなくなる．こうなってくれば，〈新モデルの探索〉段階にいたるのは避けられない，というわけである．

このライフ・サイクルは，つぎつぎと登場するプロジェクトが予期された成果をあげないだけでなく，それにともなってやはりつぎつぎと登場する開発理論［Bongartz, 1992］も，期待されたほどの効果をあげずにおわるという状況をよく示している．もちろんすべてのプロジェクトや理論がこのような運命をたどるというわけではないにせよ，外国の援助を導入し，それから利益をひきだせば，その成果にはこだわらない，という風潮がネパールでは一般的であることがよく理解される．

こうした状況からすれば，援助は富裕層に利益をもたらし，それによって導入される外貨が，彼らの消費するぜいたく品の輸入につかわれ，インフレを劇化させている，というような見解［Khadka, 1991, pp. 417-418］や，貧困層にとどかず，エリート層を利するだけの援助は，経済発展よりも，むしろ伝統的社会構造の維持と強化に役だっている，という議論［Misra and Sharma, 1983］がでてくるのもふしぎではない．援助はこの場合，所期の成果をあげ，段階的に縮小されて，最終的になくなるものというより，つぎつぎと到来し，特定の人びとに利益をもたらすような性格をもつ，とうけとられているわけである．

このようにみてくると，援助のうけ手としてのネパール，さらには政府官僚にもっぱら問題があるように考えられるが，他方ドナーに対する批判もないわけではない．ネパールの実情を知らないで，つぎつぎと流行の理論をもちこみ失敗をかさねるのは，ドナー側の責任でもある［Panday, 1983］とか，ドナーの派遣する専門家は，そのたかい報酬にふさわしい働きをしていない場合がすくなくないし，またよく働く専門家の場合でも，カウンター・パートから仕事をうばい，かえって彼らの能力の向上の障害になる傾向がある［Shrestha, 1983］という指摘は，援助の他の側面を示すものであろう．

以上，開発および援助について検討したが，ネパールの低開発の背景の理解については，いくつかの枠組みがあることが理解できたであろう．ビスタ氏の『運命論』は，もうひとつの枠組みとなるが，同時に，すでに述べたことからもわかるように，開発や援助がなぜスムースにすすなまいかということに関する，よりふかいレベルからの説明のこころみでもある．ややまえおきが長くなってしまったが，つぎに，こうした『運命論』の紹介にうつることにしたい．

2．『運命論』とその評価

『運命論』の著者ビスタ氏（写真参照）は，国際的には人類学者として知られ，とくにその主著『ネパールの人びと』［Bista, 1967］は，すでに邦訳もでており，この地域に関するすぐれた民族学的概説書として，ネパールに関心をもつ人びとにしたしまれている．同氏はまた，ネパール人とし

ては民族学研究の草分け的存在であり，トリブバン大学の最初の人類学教授に就任した．

しかし，マクファーレンも指摘するように[Macfarlane, 1990]，同氏は単に人類学者あるいは民族学者と位置づけられないほどの多彩な経歴をもっている．表1は，それを整理して示したものであるが，学者だけでなく，援助要員，行政官，外交官としても活躍している．またマクファーレンによれば，実業家として活動したこともあるという．さらに関連して，息子のK.B.ビスタ氏が，パンチャヤート時代に教育大臣をつとめたことも留意されよう．現在は，西ネパールの僻地で，NGOの活動に従事しているが，これは『運命論』で述べたことの実践でもある［Wagle, 1994］．同氏のモットーは「もっとも助力を必要とする人に奉仕することが，人生の最終目標」という［Rimal (ed.), 1992, p. 42］．筆者も何度か面談したことがあるが，精力的でかざらない人柄がうかがわれた[4]．

本書執筆について，ビスタ氏はすでに1972年ころから考えていたというが，1983年に国際交流基金の資金により，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で研究したおりに，同研究所の飯島茂教授（現桜美林大学）・石井溥教授・山本勇次研究員（現大阪経済大学教授）と，ネパールの開発について討論したことも大きな意味をもっているということであった．『運命論』に登場する日本の例［Bista, 1991, pp. 78, 89, 159］は，そのおりに同氏が入手した資料によるものと思われる．おそらく非西欧的世界に属しながらも，近代化を達成した日本につよく関心をひかれたのであろう．なおビスタ氏は，1989年に出版のネパールに関する論文集に収録された「ネパール社会の構造」［Bista, 1989］で，本書と同様の議論を展開している．以上からすれば，『運命論』は，同氏が長年あたためつづけてきたテーマといえよう．

表1：ビスタ氏の経歴［Rimal, 1992, pp. 41-42による］

年	事　　項
1928	ラリトプール（パタン）生まれ
1961	B.A.ロンドン大学（インド民族学）その後ロンドン大学・ウィスコンシン大学大学院でも研究
1960-62	中学校教頭
1961	ペンシルバニア大学ネパール語教師
1963-68	ネパールUSAID（合衆国国際開発局）の研究専門家
1965	US平和部隊トレーニング（ミズーリ大学・ワシントン大学）
1965	US平和部隊トレーニング（ハワイ大学）
1968-72	内務省僻地開発委員会計画官・秘書官
1972-75	在ラサ総領事
1975-77	ネパール再定住会社議長
1977-78	コロンビア大学訪問教授
1977-78	トリブバン大学人類学教授，ネパール・アジア研究センター所長
1978-81	トリブバン大学社会学人類学部教授
1981-88	トリブバン大学社会学人類学部長
1988-89	コロンビア大学訪問研究員
1990	琉球大学訪問研究員
1991	トリニティ・カレッジ訪問研究員

注：経歴のうち時期が前後するものは，臨時的なものである。

D.B.ビスタ氏（1990年12月1日，琉球大学の学生食堂にて）

こうした『運命論』の序論は，その執筆にいたる動機あるいは必要性の説明というよりは，後続の章の要約とでもいうような性格をもっている．ラナ時代につちかわれたネパールのエリートの価値観が，近代化の障害になっており，その根源はインドよりもちこまれたカースト制度，さらにはヒンズー教的イデオロギーにあり，とくにその運命論的性格は，人びとの労働倫理や社会構造にも反映するとしている．

第1章は，ネパールの地理，民族，歴史の概要である．これをうけて第2章では，ネパールの宗教の概要を紹介し，そのカースト制度を地域別に検討する．ここで強調されるのは，ネパールはもともと平等主義的な社会で，カースト制度はインドから徐々にもちこまれた外来的要素という点である．

第3章は，ネパール社会における家族および子どもの養育の特色が検討される．とくにその上層を構成する，ヒンズー教徒高カーストでは，男子が尊重されるので，家族計画が浸透しにくいこと（男子が生まれるまで出産をつづけ

ることによる)，女性の地位がきわめてひくいことが指摘される．また子どもどうしの喧嘩に際して，その行為の内容を問わず親が自分の子どもを弁護するといった習慣は，道徳観や社会的責任感の内的な発達の障害になっていると指摘し，これがとくにバフン（ブラーマン）の，自己反省をともなわない独善的な性格の原因になっているとする．この場合，彼らが社会的規範にしたがうのは，内的な責任感からではなく，外的な罰をおそれてのことであるともいう．

バフンに関するもうひとつの注目すべき議論は，その子どもが「けがれ」をおそれて，他のカーストや民族の子どもと遊ばないことである．彼らは孤立して育ち，ヒンズー教の僧侶としての収入がかぎられていることもあって，エリートとして，役人になるような道をえらぶことになる．

これにつづく第4章では，本書の表題でもある運命論をめぐって議論が展開する．「カルマ(業)」によって，人生のなりゆきがあらかじめ決定されているという運命論的な考え方は，達成意欲とか労働倫理にむすびつかない．また来世に対する期待により，現世の物質的な繁栄は軽蔑され，その達成は勤労によるというより，不正な手段によるものとされる．さらに，学識や儀礼をおもんじる高カーストの人びとは，他方で肉体労働を軽蔑し，それを低カーストのものと考えることになる．働く人に指示をあたえる人が，たかい社会的地位をもつのであり，教育をうけた，そうした地位にいる人は，働かなくてもよいし，働かないことについて罪悪感をいだく必要もない．この意味で，権利とか義務という概念は，西欧や日本と大きくちがい，カースト社会というコンテクストのなかで独特の意義をもつのである．

こうした価値観からすれば，個人的能力や努力による成功は，あらかじめ設定された社会秩序に反し，それをおびやかすものとさえうけとられる．努力や意欲だけで成功はかちとられるものではなく，むしろ運命に左右されていると考えられているからである．こうした態度では，他方，失敗は当の個人の責任というより，他者あるいは外的状況に帰せられることになる．試験に失敗した学生でさえ，恥いるのではなく，その責任を教師や試験官に転化してしまうわけである．

以上のような運命論的世界観の分析にくわえ，この章でもうひとつ重要な論点になるのは，「チャカリ」である．ビスタ氏によれば，ヒンズー教で「チャカリ」は，神の恩寵をねがい，待つこととされるが[5]，それが転じて，ラナ時代(1846—1950年)[6]には大きな社会意義をもつ，制度化された習慣に発展していた［pp. 89—90］．毎日のようにラナ家の宮廷に伺候し，有力者に接見するのが，それに対する忠誠を示す手段と考えられ，このための特別の時間がもうけられていたほどである．これに欠席する者は，なにかよくないたくらみを企てているのではないかと，うたがわれる一方，「チャカリ」を忠実に実行する者は，地位が保証され，将来の昇任や出世も期待できたわけである．この場合，昇任や出世において，個人的な能力よりも，「チャカリ」によって形成される，有力者との関係が重視されたことは，いうまでもない．

こうした「チャカリ」は，ラナ体制の打倒以後排斥されたが，かたちをかえて存続し，政府機関のあらゆるレベルにいきわたっている．ビスタ氏に面談した際，政府高官のオフィスを訪問すると，とくに緊急の用もなさそうなのに，話しこんでいる来客をよく目にするが，とたずねると，これこそが現在の「チャカリ」ということであった．高官のオフィスに「伺候」し，情報を交換しつつ，自己の地位の保全をはかるわけである．このためには，勤務時間も無視するのがふつうという．

このようなかたちで形成される人間関係は，個人的でインフォーマルなものといってよいが，それはフォーマルな関係以上の意義をもつことになる．そして単なる情報の交換をこえ，贈り物＝賄賂の授受にも発展する．そうした関係をもう一方でささえるのが，「アフノ・マンチェ」(自分の人＝身内）である．公式的な場面においても，身内が優先されるのがふつうで，小切手を現金化するというような場合，銀行員が身内であればはやくおわるのに，そうでないときには時間がかかることになる．こうした身内は，個人の能力とか資質には関係なくきまる．そのため，個人にとっては，何を知っているか（どんな能力をもっているか）より，(より上位の)誰を知っているかが，重要な意義をもつことになる．したがって，食事とか結婚披露宴に人を招待することにより，身内の拡大をはかっていくわけである．

以上のような「チャカリ」および「アフノ・マンチェ」が，現在の政府官僚組織のなかで，どのようにあらわれてくるか，を分析するのが第5章である．地方のイニシアティブで建設される道路の例でいえば，当事者たちは，技術者や中央政府の役人に対し，「アフノ・マンチェ」関係を駆使し，「チャカリ」によって援助や資金をひきだす．この場合，道路が全国の道路整備計画のなかにくわえられていなくても，中央政府の援助をひきだすことは充分に可能である．インフォーマルな人間関係は，こうした計画に優先するといってもよい．

「アフノ・マンチェ」関係は，他の側面でも役人の行動に影響する．なにか失敗すると，身内に影響がおよぶし，当人の無能力の証明にもなるので，役人は極力意志決定をさける．自分の地位をまもりたければ，何もしない方が（失敗がないので）よい，というわけである．このため，設定された権限に関係なく，官僚機構の上部へと，「おうかがい」が上昇していき，最終的には国王（現在は首相や閣議）の

ところまでいってしまうことになる．これで責任は分散され，何か不都合なことがあっても，誰も責任をとわれない．

こういう状況なので，高級官僚は最高権力者（パンチャヤート時代［1960—1990年］[7]には国王）に接近し，それと個人的な関係をもちたがる．また，最高権力者のとりまき（とくにパンチャヤート時代の王室秘書）が，大臣や高級官僚よりも大きな権勢をふるうことになる．

つぎの第6章では，教育が検討される．ここで特徴的なのは，知的能力や技術をたかめる手段というより，卒業資格，さらにはよい職をえるための手段として教育が位置づけられている点である．卒業資格にくわえ，たよりになる「アフノ・マンチェ」があれば，あとは「チャカリ」によって就職や昇任が保証されるのである．

教育に関連してもうひとつ重要な点は，その質だけでなく（高等教育の場合，質がひくいだけでなく，学生のモラルもひくく，量的拡大だけがおこなわれてきたといわれる），技術も軽視されていることであろう．また政府の役人は，なににもまして理想的な職業と考えられており，学生は技術を学んでも行政官になりたがる．技術系の学部に進学することは，のぞみの学部にいけなかった学生が，行政官の資格を取得するための手段となる．したがって，農業になんの熱意もなく，充分に知識もない農業技術者がうみだされ，彼らが本来担当すべき仕事は，充分に訓練をうけていない下級の役人，さらには給仕たちがおこなうという事態も発生する．

第7章では，以上をうけて，開発と援助が検討される．ネパールでは，慈善は宗教的意義をはなれて考えられず，援助のような利他的行為によって，発展をもたらし，社会を変えようとすること自体，（神にさからう）不遜なこととみなされる．このため，とくに原理主義的なヒンズー教徒は，外国援助を好まないという．しかし同時に，ドナーを万能の父のようにみなし，それに徹底的に依存するという事態も発生する．この場合は，計画の立案やその運用，資金だけでなく，それらをうごかしていく熱意までもドナーにたよることになる．そして，これがうまくいなかい場合の責任は，ドナーが負うべきであると考えられてしまう．

また，抽象的でメタフィジカルな議論を好むというエリートの性格は，計画の段階からあらわれ，非現実的プランにむすびつく．現場を知らないプランナーが，計画立案のために多額の予算をつかってしまうわけである．また開発や援助をめぐり，しばしばセミナーがひらかれるが，それは関係者が博識をひけらかし，地位の上昇をはかる場として利用される．

他方，ネパール側の資金配分は，計画の必要性や妥当性よりも，「チャカリ」との妥協のなかできめられる．これは，資金の無駄にしかならないような計画の横行にむすびつく．また一方で，政治的目的のために，経済効果や現場への適合性を無視した，みばえのよい工学的プロジェクトがこのまれることにもなる．

こうした計画によってつくられる公共の建造物は，したがって，住民にとっては，自分たちのものとは考えられない．それは，ほとんどの場合，民族も育ちもちがう政府の役人が，あずかり知らないところで，住民の便宜を無視して計画し，つくったもので，はじめから自分たちのものではないし，自分たちが維持管理すべきものでもない，と考えられてしまう．したがって，そうしたものの多くが，つかわれないで，メンテナンスも不充分なまま，くずれおちていくのも当然ということになる．

以上をうけた結論で強調されるのは，ヒンズー教徒高カーストのイデオロギーに毒されない，勤労や協調をおもんじる，平等主義的な人びとの存在である．当然のことながら，この多くは山岳・丘陵地帯に居住する少数民族となるが，彼らのもつ美点をうけつぎながら，カースト制度を打破し，あたらしい世代が登場してくるのが期待されることになる．

このような内容をもつ『運命論』は，前節で示したような開発・援助の実情の裏側を説明するものといえよう．開発計画の実施の停滞は，直接的にはバンスコタや世界銀行のレポートが指摘するような要因によるが，そのさらに背後には，『運命論』の指摘するようなネパールの官僚がもつ独特の行動パターンがあるというわけである．

「アフノ・マンチェ」関係にもとづいた「チャカリ」によって個人の地位やポストがきまるので，プロジェクト・スタッフには，技術や経験のない者の配属される確率がたかくなる．またそうしたスタッフのつぎのポストも，勤務成績というより，「チャカリ」によってきまるので，当然のことながら，仕事への意欲はひくくなる．仕事をすれば，かえって失敗のチャンスをふやすことになるので，むしろ他のオフィスに「伺候」し，「チャカリ」に精をだした方がよいということになる．

そこには，したがって，近代的な労働倫理や内的な社会的責任感が欠けているといえよう．勤務時間中に，「チャカリ」にふけっていれば，任務が充分に遂行できるはずもないが，それについて罪悪感をもつことがないのである．

これでは，プロジェクトの実施がおくれ，コストがオーバーし，経済効率もわるくなるのは必然的である．プロジェクトのスタッフだけでなく，関係する政府機関の官僚のほとんどに，同様に行動パターンが浸透している以上，なにごとによらずスムースにすすむことはありえない，と考えた方がよい．

『運命論』が援助関係者や外国人のあいだで，好評をもってむかえられたのは，以上からすれば，よく理解できよう．

とくに援助関係者の場合，彼らが衝突し，悪戦苦闘する相手について，つねづねいだいてきた疑問に対し，ひとつの体系的解答をあたえることになったと考えられる．表2は，『運命論』に対する書評・意見を簡単に分類して示したものであるが，「好意的」と判断できるのは，ほとんどネパール人以外の執筆者によることは注目されよう．

この場合，さらに興味ぶかいのは，マクファーレンが上記書評のなかで，ビスタ氏について「アウトサイダーにしてインサイダー」と表現をしている［Macfarlane, 1990; 1994, p. 115］ことであろう．彼は，ネパールを外側からも内側からもながめることができる，というわけである．この点からすれば，『運命論』は外国人の視点もあわせもち，外国人がなかなか表現できない意見までも，代弁しているということになる．

筆者は，1977年にネパール中西部の都市，ポカラから徒歩で2－3日かかるマガール族（丘陵地帯の少数民族のひとつ）の村で調査したおり，ヒンズー教徒高カーストに属するリエゾン・オフィサー（連絡官）と2カ月ほど生活をともにしたことがある．このオフィサーの行動をみているあいだに，彼が常時自分のカーストをつよく意識していることや，肉体労働を軽蔑していることを，体験にちかいかたちで知った．他方マガール族の人びとにたいしては，日本の農村の人びとに対するような親近感をもつことになった．勤勉で肉体労働をいとわず，しかも相互に協調的なマガール族のすがたからこの親近感がうまれてきたことは，いうまでもない．こうした筆者の思いの一部は，当のオフィサーが感知するところとなり，「日本人はマガール族を好み，われわれヒンズー教徒高カーストがきらいなのだ」と指摘されることになった．もちろん，これほどはっきりした好悪の感情をもつわけではないが，ネパールで長期間すごした日本人には，筆者と同様の思いをもつ人が多い．おそらく欧米人でも，同様の感想をもつ場合がすくなくないであろう．

この場合，そうした思いをあからさまに表現することは，外国人としては不可能にちかい．表現のしかたによっては，差別的，さらにはエスノセントリック（自民族中心主義的）な思いすごしとうけとられかねない．またヒンズー教徒高カーストに属す人たちや少数民族の人たちが，すべてステレオ・タイプ化した行動様式をもつわけでもない．『運命論』は，この意味で，外国人が漠然といだいている，以上のような思いを，ネパール人自身が大胆に表現したという点に意義があるといってよい．これほどまでのネパール文化に対する批判は，ネパール人でなければ書けないのである．

このように外国人に支持される『運命論』が，ネパール人によって逆に批判される，という構図があることは，すでに指摘されている［Bhandari, 1992］．しかし，その書評・意見をさらにくわしく検討していくと，事情はもうすこし複雑である．

まず，『運命論』に対して好意的な態度をとるのは，外国人だけではないという点があげられる．表2では，執筆者がネパール人の場合はその所属するカーストあるいは民族集団も示してある．ここでは一例（ライ＝東部丘陵地帯に居住する少数民族に属す執筆者の場合）しかないが，そのほかにも，ヒンズー教徒高カースト以外の人で『運命論』に共感する人がいるという情報をえている．

つぎに批判的な態度を示す場合であるが，これにはバフン（ブラーマン）に属す執筆者が多い．『運命論』では，カースト体系の頂点にたち，ヒンズー教的イデオロギーの普及者として活動するバフンの行動様式の批判的検討が，もっとも重要なテーマになっていることからすれば，これは当然と思われるかも知れない．しかし，執筆者のカースト意識がむきだしに表現されることはほとんどなく，むしろ『運命論』に示される立場や，さまざまな見解に対する反論というかたちをとる．

そこにあらわれるのは，運命論的な考え方はネパールあるいは，ヒンズー教徒だけのものではないとか，「チャカリ」や「アフノ・マンチェ」のような現象も，世界中にみられるといった指摘である．ネパールの低開発の文化的・社会

表2：『運命論』に関する書評・投書

好　意　的	批　判　的	そ　の　他
Macfarlane (1990)	Dahal (1990) (バフン)	Mikesell (1992)
de Sales (1991)	Pahari (1992) (チェトリ)	Sharma, S (1992) (バフン)
Laird (1992)	Luintel (1992) (バフン)	
Bennet (1992)	Bhandari (1992) (バフン)	
Molin (1992)	Malla (1992) (ネワール)	
Rai (1992) * (ライ)		

＊印は，『運命論』への明確な言及がないが，あきらかにそれを支持しているもの。
なお，Macfarlane (1990) および Dahal (1990) は，『運命論』の出版時よりさかのぼるが，前者は原稿により執筆されたことがはっきりしている。後者は，雑誌の出版がおくれ，さかのぼった発行年次が付されたためと思われる。また Pahari (1992) の著者のカーストは，ビスタ氏によればチェトリ（在米）である。

的側面の理解という『運命論』の主題に，議論がいきつかず，ビスタ氏自身がみとめるような『運命論』の欠点[Bista, 1992] の列挙におわるという傾向があきらかである．これに対し，「木を見て森を見ない」批判であるという評がよせられる［Bennet, 1992］のも当然であろう．のちにみるように，あるいは，このような批判の展開のしかたのなかに，批評者のカースト意識がかくされている可能性もある．

他方，批評者がバフンに属さないという点で，Malla [1992] の『運命論』評が注目されるが，残念ながらその論旨はたかい水準のものとはいえない．バフンのネパール社会における役割を検討するこのエッセイは，『運命論』の主題を紹介しつつ，彼らは運命論者ではないと主張する．バフンがネパールの各界のトップで活躍するできるのは，運命論にとらわれていては不可能で，むしろ彼らこそが，ネパールではもっともたかいレベルのプロテスタント的労働倫理をもっているからと考えられる，というわけである．

こうした見解は，バフンがネパール社会のなかでいかに有利な位置をしめてきたかを無視していると考えられる．相対的に他のカースより富裕なバフンは，教育にアクセスしやすい．またとくにパンチャヤート時代に推進されたネパール語による教育は，他の少数民族にくらべ，ネパール語を母語とするヒンズー教徒高カーストの子弟にとって圧倒的に有利である．彼らは最初から母語で教育をうけることができるからである．これらの条件を考えるだけでも，バフンが知的な職業につく機会は，他の人びとよりもはるかに大きくなることが理解されよう．これを無視してバフンの今日の地位を考えるのには，大きな無理があるといってよい．

また，もし彼らの議論が正しいとしても，他方で，ヒンズー教徒高カースト出身の役人が主体をしめる政府組織の規律が，なぜ上記のように弛緩し，近代的官僚制とはちがう原理で運用されているか，という点に関する説明が困難になる．バフンがプロテスタント的倫理をもっているとすれば，もっと効率的な官僚組織が実現していてもよいはずである．

以上のような Malla［1992］の議論には，同時に，ヒンズー教徒高カーストに属すエリートによるネパール社会支配といってもよいような現状に対する肯定的な態度がみとめられる．これに関連して，「ビスタは，ネパールを研究する社会学者や人類学者の西欧的伝統に影響されている」［Bhandari, 1992］とか，「(ビスタの) 論理からすれば，第3世界の発展のもっとも効果的方法は，土着文化を西欧や日本の〈成功した文化〉におきかえることとなる」［Pahari, 1992, p. 54］といった，先進国の文化の影響に対する警戒感といえるようなものが批判のなかにあらわれる点も注目されよう．

これは一方で，『運命論』の著者であるビスタ氏が「アウトサイダーにしてインサイダー」という性格をもつことに関連する．『運命論』では，ネパール人（エリート）の倫理観や行動様式を，西欧や東アジア（とくに日本）のそれと対照しつつ，前者を批判するというくだりがしばしば登場する[とくに第4章]．これは，外国の基準による自国の文化や社会の断罪でもあり，ビスタ氏のよってたつ基盤が西欧や東アジアにあるという印象をあたえる．

他方，上記の『運命論』に対する警戒感は，批判者が文化的にも保守的であることを示唆する．『運命論』は，ネパールの一部の人たちは，政治的にはインドにおびやかされていると感じながらも，インドの宗教文化に一体感をもち，文化的には西欧の影響をおそれていることを指摘している[p. 9]．もしこの指摘が批判者にあてはまるとすれば，この文化的な保守主義は，ヒンズー教的な文化への親近感と表裏一体の関係にあるとみてよい．

このようにみてくると，『運命論』に対する批判の性格がすこしずつはっきりしてくる．それは『運命論』が批判の対象とするものに，たいへんちかいからこそ，はげしい反発を示すわけである．この点からすれば，『運命論』の評価の分裂は必然的であると同時に，だんだん明確になりつつあるネパール社会の亀裂を反映したものであるとみてよい．この亀裂は，少数民族の自己主張の強化，中等教育におけるサンスクリット語の強制に対する反発などさまざまな表現をとっている［Fisher, 1993 ; Shah, 1993a など］が，今後さらにふかまる可能性がたかい．

そうした意味で，『運命論』がネパール社会を分裂させる危険な書物と批判される［Pahari, 1992, p. 52］のもよく理解できよう．ヒンズー教徒高カーストのドミナンスに対する批判は，上記の亀裂にうちこまれたクサビのような役割をはたす可能性があるからである．高名な学者であるビスタ氏が，同時にヒンズー教徒高カーストの出身であることからすれば，このクサビは，低カーストや少数民族の不満の表明以上の意義をもつことになるわけである．

3．ネパールの官僚制と低開発

ネパールの社会と文化の現状に対する批判としての『運命論』が，その官僚制をとりあげ，検討していることはすでにみたとおりである．この官僚制の問題は，『運命論』の中心的なテーマとなっているだけでなく，開発や援助を考える場合にも重要な意義をもっており，これまでさまざまな角度から研究されてきた．筆者にはまだ未消化の文献がすくなくないが，以下ではさらにこうしたネパール官僚制の認識の展開を検討し，その『運命論』との関係をみておくことにしたい．

ネパールに最初に来訪した日本人，河口慧海は，今世紀初頭，ネパールの当時の宰相，チャンドラ・シャムシェルJ.B.ラナにあてた手紙のなかで，「チャカリ」を封建的な遺制とし，その改革を進言したという［Thapa, 1993］．この種の問題は早い時期から認識されていたことがわかるが，ただしその社会科学的検討は，ビスタ氏によれば，Rose and Fisher［1970］にはじまるという．この書物は，アメリカの政治学者により，ネパールの政治の概説書として，パンチャヤート時代に書かれたもので，出版からすでに四半世紀以上が経過しているが，まずこれからみていきたい．

Rose and Fisher［1970, pp. 67-72］は，ネパール政府の官僚行政機構の弱点として，①意志決定が混乱していること，②政策の実行がともなわないこと，③財政運用の問題，④「チャカリ」，⑤役人の身分不安定，⑥場当たり的な組織改革があるとしている．いずれも興味ぶかいものなので順にみていきたい．

まず①意志決定については，ラナ時代より行政機構がいちじるしく拡大し，複雑な問題が発生しているにもかかわらず，国王には依然としてラナの宰相同様の専制的な役割が期待されていた．しかし国王は，そうした役割に充分応えることができない，という状況が出現していたという．このため，意志決定の責任者がはっきりせず，官僚たちは些細なことでも宮廷まで指示があおぎ，これがうまくいかないときには，臨時の委員会をつくり，責任を分散し問題を処理することになった．この結果，意志決定がおくれるという弊害が発生していた．

同様に深刻なのが，②政策の実行がともなわないことで，この背景として官僚機構の不備もあるが，さらに重要なのは，高級官僚が自分の家族や階層に不利と思われる場合には，任務をはたさないという事情があった．おもてだって政策に反対するリスクを負うよりは，ひそかなサボタージュによる抵抗がおこなわれていたわけである．

つぎの③財政運用の問題としてまずあげられるが，財政的うらづけが保証されるまえからでも，政策が実行にうつされてしまうという点である．これに対応して予算は，行政の運用がしたがうべき枠組みというより，大ざっぱなガイドラインとしての性格をもつにすぎず，不都合があればすぐに無視されていたという．また，会計報告や監査も不充分となるが，これらは，首相の個人的家計と国家財政が区別されていなかったラナ時代の会計システムによるところが大きいとされる．

④「チャカリ」は，能力主義の障害になるだけでなく，タライ地方（インド国境地帯の低地）出身者など，有力者にコネをもたずこれに参加できない人びとの採用・昇任をいちじるしく不利にしていた．

こうした「チャカリ」と密接な関係にあるのが，⑤役人の身分不安定で，政治的な理由で理不尽なパージがしばしばおこなわれ，若い有能な官僚の意欲をそいでしまっていた．出世にとっては，仕事の能力よりも，政治動向や有力な党派に属すことが重要な意義をもつからである．

さらに⑥場当たり的な組織改革は，それが一貫性をもたないだけでなく，外来の新制度が在来の制度と無関係に導入されて，ネパールの伝統的価値観や倫理と衝突してしまうという事態をさしている．

すでに四半世紀も前に指摘された，こうした官僚制の特色は，いままでみてきたところからすれば，あまりかわっていないことが注目されよう．ラナ時代の遺制とされるものも，いまなお強固に存続していることがあきらかである．

1980年前後になると，この問題はネパール人研究者によっても論じられることになる．腐敗をはじめとする官僚制の病理的様態が検討され，行政における非能率の原因が追及される［Pradhan and Dhungel, 1980 ; Poudyal, 1981 ; 1984, pp. 87-101 など］．また，いろいろこころみられる行政改革が，なぜ期待された効果をあげられないか，という問題にも検討がおよぶ［Poudyal, 1989, pp. 207-231］．これらにあらわれてくるのは，Rose and Fisher［1970］の示すものと，基本的にかわらないだけでなく，官僚機構の拡大や援助の増大にともない，その弊害がさらに大きくなっているという状況である．とくに援助の増大は，多額の資金の流入をまねき，コンサルタントの指名，援助物資の輸入といった機会を通じ，汚職や腐敗が国境をこえてまでも発展していると指摘される［Pradhan and Dhungel, 1980, p. 106］．

こうした問題を考える際に示唆的なのは，Shaha［1982, pp. 96-134］の世襲エリートの研究である．そこでは，王族・宗教関係者・軍人・地主といった伝統的エリートにくわえ，官僚・ビジネスマンなど新タイプのエリートが構成する，ネパールの権力構造がテーマとなる．これらのエリートを支配するのは，フォーマルな関係よりも，私的でインフォーマルな関係を優先するという行動様式であり，それによって形成される党派あるいは派閥が，最高権力者としての国王への接近をめぐってあらそうという構図がえがきだされる．そこでは策略や陰謀が横行し，党派間の対立は政策レベルのものというより，人格レベルのものとなる．その場合，官僚組織はこのなかにくみこまれ，とくにその上層部には，同様の行動様式の浸透がみられるわけである．著者は，かつて閣僚やトップ・レベルの外交官をつとめ，パンチャヤート時代には政治的迫害をうけた経験もあり，現在は著術家・人権運動家として活躍する知識人である［Rimal (ed.), 1992, pp. 220-221］．この体験にもとづく分析から，官僚組織の問題は，単にそれにとどまらず，ネパールの権力構造の問題でもあることが理解されよう．

他方，援助（の失敗）と官僚機構との関係については，1970年代からすでに関心がよせられている［Wildavsky, 1972］が，1980年代以降になると，さらに検討が増大する．すでに一部引用したものにくわえ，外国人専門家とネパールの官僚機構との関係をひろく論じたShrestha［1983］，医療援助を例に，外国人専門家とネパール人官僚の行動様式のちがい，さらにそれから発生する問題を検討するJustice［1986, pp. 15-45］，ネパールにおける援助の効率のわるさの原因を官僚機構の特色にもとめ，これを多角的に検討するShrestha［1990, pp. 93-109］，コミュニティー・フォレストリーの普及における政府官僚の役割とその問題点に考察をくわえるGilmore and Fisher［1991, pp, 181-193］などがそれである．いずれでも，Rose and Fisher［1970］が指摘したような問題に言及し，官僚機構の特性が援助の立案や実施における大きな障害になっていることを強調する．

官僚制そのものを体系的に分析するわけではないが，民間企業の活動に関連しても，官僚機構の役割は注目される．Zivetz［1992, pp. 133-188］は，政府組織が，民間企業の発展を促進するよりも，むしろその障害として作用していることを，多彩な例を紹介しながら示している．企業家は，予期せぬ政策の変化とか，役人による法解釈のちがい，手続きのおくれ等のために，多大な時間と労力をついやさねばならないのである．さらに工業資本家の社会文化的特性を検討するKondos *et al.*［1991］は，彼らが政府官僚に対し多くの不満をいだきながらも，ビジネスをスムースにすすめるためには，縁故をたより，「チャカリ」をおこない，さらに賄賂という手段を採用する場合もすくなくないことをあきらかにしている．これから，官僚機構は，開発や援助にかぎらず，経済発展をささえるはずの産業活動にとっても大きな障害となっているだけでなく，その行動様式は，民間企業にも浸透していることが理解される．

他方，官僚機構と地方の人びとの関係にも検討がおよんでいる．ネパール西部の町の政府の出先機関の官僚と彼らから職を紹介してもらおうとする人びとの「チャカリ」や賄賂による交渉を分析するCaplan［1971］は，その早期の研究例である．ネパール中西部の援助プロジェクトの調査結果から，農村の人びとが「開発」をどう理解しているかを検討するStone［1989］もこうした研究とみることができる．村人にとって，「開発」（ネパール語〝bikas〟）はまず外部からもたらされる，学校やヘルス・ポスト[8]，水道のような具体的な施設としてイメージされ，そうしたものは，官僚など外部の人間との個人的な関係をもつ地方エリートのところにまずやってくると考えられている．これらは，地方の人びと行動や考え方も，すでに示したような官僚制の特色に対応するものとして理解すべきことを示している．

同時に，身内びいき（〝natabad-kripabad〟）をより深いレベルで理解する試みもあらわれる［Kondos, 1987］．ネパールでは，現金の授受をともなう賄賂（〝ghus〟）や横領は道徳的に非難されるが，現物の授受をともなう「チャカリ」は非難されず，身内びいきはむしろ社会的規範にそった当然の行動とみなされるという．

以上の文献がすべて『運命論』に引用されているわけではないが，これからすれば，その官僚批判は，とくに過激なものではなく，むしろ研究成果をふまえたオーソドックスなものであることが理解される．ビスタ氏自身，ネパールの官僚制の研究をてがけたことがある［Bista, 1971. ただし筆者未見］ことからすれば，これは当然であろう．

それにもかかわらず『運命論』が上記のような反発をよぶのは，こうした官僚制の背後に，ヒンズー教的イデオロギーやカースト制度があり，その背後にさらに，これらをささえるヒンズー教徒高カーストの存在があることを明言したことにある，といってよいであろう．この場合，政府官僚，さらにはネパール社会のエリートの多くが，こうしたヒンズー教徒高カーストであってみれば，『運命論』は，ヒンズー教徒高カースト批判というよりは，ネパールの知識人批判という色彩を濃厚にもつことになる．したがって，エリートのあつまるカトマンズの高級ホテルでひらかれているパーティーの話題として，『運命論』はもっともふさわしくないものとなるのも当然であろう．官僚制批判が制度の批判でおわらずに，それをささえる社会階層の行動様式，さらには倫理感の批判に転化し，すくなからぬ知識人が，名ざしにちかいかたちで自分たちが非難されていると感じているのである．

この点からすれば，運命論的考え方は，ネパールあるいはヒンズーにかぎられないとか，「チャカリ」・「アフノ・マンチェ」といった現象は世界的にみられるという，『運命論』批判にみられる指摘は，ネパールのヒンズー教徒高カースト知識人の自己防衛的な反応とみなすことも可能であろう．類似の低開発の原因は，世界をさがせばいくらでもみつかり，とくにネパールだけがわるいのではない，というわけである．

むすびにかえて

以上，ネパールの低開発論としての『運命論』を紹介し，それに対する人びとの反応を検討してきた．この結果，『運命論』は，低開発の一要因としてのヒンズー教的イデオロギーやカースト制度の批判をこえて，ネパールのエリート層の主体をしめる，ヒンズー教徒高カースト知識人に対する批判であることがはっきりしてきた．

このような批判は，とくに外国人のあいだで暗黙の了解

事項になっていたこと［Macfarlane, 1990 ; 1994, p. 125］，さらには私的な場所でのみ語られていたことを，白日のもとにさらけだした，という性格がつよいこともあって，たちまちその支持をうけることになった．他方，多くのネパール人エリートからは，つよい反発をまねき，『運命論』はひとつの問題の書としてのとりあつかいをうけている．

この反発がはげしいのは，『運命論』が，単なるヒンズー教徒高カーストのドミナンスに対する批判以上の性格をもっているからにほかならない．『運命論』は，彼らの開発における役割，さらには倫理感にまでするどい検討と批判をくわえているのである．集団としてみれば，彼らは自己の知識を社会に還元せず，個人的な利益を追求するだけで，その意識は〝noblesse oblige〟といわれるものとは，ほどとおいものとなる．開発や援助のスムースな実行の障害になるだけでなく，腐敗・汚職を通じて，私腹をこやし，貴重な公共の資源を乱費している，というわけである．

この場合，ヒンズー教徒高カースト，とくにバフンが，今日のネパール社会におけるヒンズー教的イデオロギーやカースト制度の役割について，どのように考えているかが問題となるが，それはシャルマのふたつのエッセイ［Sharma, P.R., 1992 ; 1994］によくあらわれている．これらは，「バフンたたき」とよんでよいような，ヒンズー教徒高カースト批判の風潮［Malla, 1992］に対するおだやかな反論というかたちをとり，『運命論』に対する言及はほとんどないが，あきらかにそれをつよく意識したものである．

上記エッセイでは，一方で，ラナ時代以来のネパールの体制が，ヒンズー教徒高カーストに有利であったことをみとめながらも，他方で少数民族の自己主張の強化のような傾向は分離主義的で危険であるし，ヒンズー教によって設定された社会秩序のおかげで，多民族国家ネパールの調和がまがりなりにも保持されてきたことを重視する．そしてインドで採用されているような，少数民族の言語や文化を尊重する政策（留保制度など）が，ネパールにも必要と指摘することになる．この場合，民主化後の今日もネパールがヒンズー国家を自称しているのは，ラベル以上のものではなく，国家のアイデンティティーにとっては，ヒンズー教はよわい基礎となっているにすぎない．したがってそれは，ヒンズー教徒以外の人びとを差別するものではない，と主張されることになる．

ヒンズー教に国家統合の理念としての積極的役割をあたえようとするこの議論では，そのイデオロギーやカースト制度に対する批判はほとんどない．カースト制度は，1963年の法改正によりなくなった，といわんばかりの態度である．最近は，バフンもブタやスイギュウの肉を食べるという指摘は，これに対応し，カーストの問題を単なる習慣レベルのものとしてとらえようとしている．『運命論』の提起する問題は，ここではたくみに回避され，あたかも解決のすんだ問題としてとりあつかわれる．バフンの各界のトップでの活躍は，カースト的特権のせいではなく，教育のおかげであり，さらには彼らがそのカースト的習慣を捨てているからと主張される．

こうした見解が，ヒンズー教徒高カーストの一般的見解であるとすれば，『運命論』の評価をめぐる分裂は必然的であろう．彼らにしてみれば，『運命論』は，過去のいきさつにこだわり，いわれのない批判をなげかけていることになる．

『運命論』があらわにした，こうした分裂が，今後のネパールの開発，さらにはそれに対する援助にどう関係するかは，まだこれからの問題といってよいが，この場合留意しておくべきなのは，『運命論』が英語で書かれ，その読者層はネパールのエリート層や外国人にかぎられているという点である．この書物の主張することが，人口の大多数をしめる農民やその他の庶民にまで到達するには，まだ時間を要する[9]．また，『運命論』が指摘するような，社会や文化に関連する問題は，具体的な政策や援助に直接反映させるのは困難だし，それによって急激に変化するものでもない．

その意味で注目されるのは，むしろ『運命論』の論旨に関連する問題が，民主化後のネパールでは，さまざまな分野で急速に展開していることであろう［石井，1993；小林，1997］．すでに一部ふれたように，少数民族の自己主張の強化［Fisher, 1993 ; Shah, 1993a ; 鹿野，1995；鈴木，1997；南，1997］などにくわえ，キリスト教の布教［Shah, 1993b など］といった，ネパールの文化や社会，さらにはエスニシティにかかわる変化や，それをめぐる対立が表面化しているのである．また，研究レベルでは，エスニシティと民間企業経営，さらには企業家精神との関係についても検討がすすみ，『運命論』が期待する少数民族の経済活動についても新知見が増大している［Zivetz, 1992 など］．おそらく，『運命論』が大きな影響力をもつのは，こうした分野においてであろう．開発や援助に直接関与しない，社会運動や研究に対して，『運命論』は理論的根拠や分析の枠組みを提供する可能性が大きい．その意味で，これらで『運命論』が将来どう読まれ，その主張がどうとりあつかわれるかに注目していくことは，ネパールの社会や文化の変化を追跡していくうえで大きな意義のあることであろう．

〈付記〉本稿は，1993年4月から1995年6月まで，筆者が外務省専門調査員として在ネパール日本大使館に在勤したおりに，外務省に提出した同タイトルの報告書（1994年7月に提出）をもとにしている．この報告書は，日本人の援助関係者にビスタ氏の『運命論』をひろく知っていただくた

めに執筆し，大使館内や国際協力事業団（JICA）オフィスなどにコピーが配布された．海外青年協力隊の隊員をふくむ ODA 関係者だけでなく，NGO 関係者にも読まれることになったと聞いている．また大使館でもビスタ氏との懇談の機会をもった．

筆者の帰国後，上記報告書が出版されたかどうかとの問い合わせをうけたが，なかなかその機会がなく，そのままにしていた．しかし今回『比較社会文化』編集委員会に予備的に査読していただいたところ，掲載可能との返事をえたので，最小限の修正をくわえ原稿を作製した．印刷公表の機会をあたえていただいた同誌編集委員会に感謝したい．上記報告書はすでに南［1997］に引用されていることを付記しておきたい．

なお，最近ビスタ氏は行方不明状態と聞いている．NGO 活動をしておられるジュムラから，ネパールガンジにむかい，その後の消息がわからないとのことであるが，ご無事をお祈りしたい．

注

1）ビスタ氏本人にたしかめたところによれば，この書評は『運命論』の原稿により書かれたもので，その出版に際しては，表紙に書評の一部が掲載されている．

2）カーペット産業はチベット難民への授産事業としてネパールで開始されたが，今日はインド北部にもひろがっている．

3）ネパールでは，公共料金がサービスに必要なコストにくらべ安く設定されている場合が多く，公共サービス機関の慢性的な赤字体質の原因になっている．このため，それに関する援助をおこなうドナー側よりたびたび値上げの勧告がおこなわれている．

4）こうしたビスタ氏の人柄について想起されるのは，1990年12月1日，琉球大学でビスタ氏とはじめて接したときの同氏の態度である．午後おそくまで同氏と話し，学生食堂で食事をともにしたおり，これは同氏の口にあわないのではないかと懸念したところ，ネパールのような貧しい国からきているのに，食事のことなどで不満をもつことはできないと決然といわれた．この食事の際に同氏が知識人の責任（"nobless oblige" ということばを使用された）をしきりと強調されたことも忘れることができない．

5）Kondos［1987, p. 19］によれば，「チャカリ」はペルシャ語起源という．

6）この間ラナ家の独裁状態がつづき，国王の権威は名目的なものとなった．

7）1960年の国王のクーデターにより議会が解散され，以後政党活動が禁止されて，国王主導の政治がおこなわれた．パンチャヤートは，議会にかわり村レベルから全国レベルまで設置された翼賛的な会議をさす．

8）地方に配置された簡素な医療施設をさす．

9）ビスタ氏は，『運命論』のネパール語版を出版したいとのことである．

文　献

アミン，サミール著・西川　潤訳（1983）『不均等発展：周辺資本主義の社会構成体に関する試論』東京：東洋経済新報社，455p.

Banskota, M. (1983): Foreign aid and the poor: Some observations on Nepal's experience. IDS (ed.), *Foreign Aid and Development in Nepal.* Kathmandu: Integrated Development Systems, pp. 35-83.

Banskota, M. (1992): Dimensions of unsustainability. ICIMOD (ed.), *Nepal: Economic Policies for Sustainable Development.* Manila: Asian Development Bank and Kathmandu: International Centre for Integrated Mountain Development, pp. 23-33.

Bennet, E.M. (1992): Is Pahari being defensive? *Himal*, 5(3), pp. 4-5.

Berreman, G.D. (1983): Identity definition, assertion and policization in the central Himalayas. A. Jacobson-Widding (ed.), *Identity: Personal and Socio-cultural.* Uppsala: Acta Universitasis Upsaliensis, pp. 289-318.

Bhandari, D.P. (1992): Archetype, not stereotype. *Himal,* 5(4), pp. 4-5.

Bista, D.B. (1967): *People of Nepal.* Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar, 210p.（D. B. ビスタ著・田村真知子訳『ネパールの人々 I，II』東京：古今書院，1982，1983）.

Bista, D.B. (1971): Frustration in Nepali bureaucracy. P. Pradhan (ed.), *Aspects of Development Administration.* Kathmandu: Centre for Economic Development and Administration.

Bista, D.B. (1989): The structure of Nepali society. K.P. Malla (ed.), *Nepal: Perspectives on Continuity and Change.* Kirtipur: Centre for Nepal and Asian Studies, pp. 169-191.

Bista, D.B. (1991): *Fatalism and Development: Nepal's Struggle for Modernization.* Calcutta: Orient Longman, 187p.

Bista, D.B. (1992): Hawking the anomalous. *Himal,* 5(6), p. 7.

Bista, K.B. (1988): *Garment Industry in Nepal: A Socio-Economic Study.* Kirtipur: Centre for Economic Development and Administration, Tribhuvan University, 125p.

Blaikie, K., J. Cameron and D. Seddon (1980): *Nepal in Crisis: Growth and Stagnation at the Periphery.* Oxford: Clarendon Press, 311p.

Bongartz, H. (1992): *Development Theories: NGOs and Self-help Organizations.* Kathmandu: Nepal Foundations for Advanced Studies, 33p.

Cohen, N.P. (1992): Four decades of lessons: An economist's viewpoint. C.A. Skerry *et al.* (eds.), *Four Decades of Development: The History of U.S. Assistance to Nepal, 1951-1991.* Kathmandu: United States Agency for International Development, pp. 363-371.

Dahal, D.R. (1990): Dor Bahadur Bista: Fatalism and Development (book review). *Contributions to Nepalese Studies*, 17 (1), pp. 85-92.

Fisher, W.F. (1993): Nationalism and the Janajati. *Himal,* 6 (2), pp. 11-14.

Gilmore, D.A. and R.J. Fisher (1991): *Villagers, Forests and Foresters: The Philosophy, Process and Practice of Community Forestry in Nepal.* Kathmandu: Sahayogi Press, 212p.

石井　溥（1993）：「〈ネワール的〉な国から〈ネパール的〉国家へ：

南アジアにおける多民族・多言語社会の国民形成」飯島　茂編『せめぎあう〈民族〉と国家：人類学的視座から』京都：アカデミア出版会，pp. 131-159.

Justice, J. (1986): *Policies, Plans, and People: Foreign Aid and Health Development.* Berkeley: University of California Press, 202p.

鹿野勝彦 (1995)：「カトマンズのシェルパ社会：シェルパ・サーヴィス・センターの組織と活動を中心に」『金沢大学文学部論集（行動科学篇）』15，pp. 65-85.

Khadka, N. (1981): *Foreign Aid, Poverty and Stagnation in Nepal.* New Delhi: Vikas, 447p.

小林　茂 (1997)：「ネパールヒマラヤにみる多民族の共生と摩擦」酒井治孝編『ヒマラヤの自然誌』東京：東海大学出版会，pp. 271-284.

Kondos, A. (1987): The question of 'corruption' in Nepal. *Mankind,* 17(1), pp. 15-29.

Kondos, A., V. Kondos and I. Ban (1991): Some socio-cultural aspects of private industrial capital in Nepal. *Contributions to Nepalese Studies,* 18(2), pp. 175-197.

Laird, T. (1992): Corruption and Fatalism. *Himal,* 5(2), p. 1.

Luintel, Y.R. (1992): Hindu values and Kathmandu. *Himal*, 5(2), p. 1.

Macfarlane, A. (1990): Fatalism and development in Nepal. *Cambridge Anthropology*, 14 (Reprinted in M. Hutt (ed.), *Nepal in the Nineties*, Delhi: Oxford University Press, 1994, pp. 106-127).

Malla, K.P. (1992): Bahunvada: Myth or reality? *Himal*, 5(3), pp. 22-24.

Mikesell, S. (1992): Misnomered development. *Himal*, 5(4), p. 4.

南真木人 (1997)：「開発一元論と文化相対主義：ネパールの近代化をめぐって」『民族学研究』62(2)，pp. 227-243.

Misra, C. and P. Sharma (1983): Foreign aid and social structure: Notes on intra-state relationship. IDS (ed.), *Foreign Aid and Development in Nepal.* Kathmandu: Integrated Development Systems, pp. 1-17.

Molin, N. (1992): Personal faith and public doctrine. *Himal*, 5(4), pp. 3-4.

Pahari, A. (1992): Fatal myth: A critique of Fatalism and Development. *Himal*, 5(1), pp. 52-54.

Panday, D.R. (1983): Foreign aid in Nepal's development. IDS (ed.), *Foreign Aid and Development in Nepal.* Kathmandu: Integrated Development Systems, pp. 270-312.

Poudyal, M.P. (1981): Bureaupathology in Nepal. *Public Administration Journal*, 4(1), pp. 24-37.

Poudyal, M.P. (1984): *Public Administration and Nation-Building in Nepal.* New Delhi: NBO Publishers, 127p.

Poudyal, M.P. (1989): *Administrative Reforms in Nepal.* New Delhi: National Book Organization, 293p.

Prandhan, P. and R. Dhungel (1980): Negative bureaucratic behavior and development with reference to Nepal. *Journal of Development and Adminitrative Studies,* 2(1-2), pp. 98-120.

Rai, R.K. (1992): Truth denied. *Himal*, 5(4), pp. 2-3.

Rimal, N.N. (1992): *Who's Who-Nepal.* Kathmandu: National Research Associates, 335p.

Rose, L.E. and M.W. Fisher (1970): *The Politics of Nepal: Persistence and Change in an Asian Monarchy.* Ithaca: Cornell University Press, 197p.

de Sales, A. (1991): Dor Bahadur Bista's Fatalism and Development. *European Bulletin of Himalayan Research*, 2, pp. 39-41.

Shah, S. (1993a): Throes of a fledgling nation. *Himal*, 6(2), pp. 7-10.

Shah, S. (1993b): The gospel comes to the Hindu kingdom. *Himal*, 6(5), pp. 35-40.

Shaha, R. (1982): *Essays in the practice of government in Nepal.* New Delhi: Manohar, 258p.（本書引用部分は，R. Shaha: *Politics in Nepal 1980-1991.* New Delhi: Manohar, 1992, pp. 14-47 に再録）.

Sharma, P.R. (1992): How to tend this garden? *Himal*, 5(3), pp. 7-9.

Sharma, P.R. (1994): Bahuns in the Nepali state. *Himal*, 7(2), pp. 41-45.

Sharma,S. (1992): Not caste but class. *Himal*, 5(6), pp. 4-5.

Shrestha, B.K. (1983): Technical assistance and the growth of administration in Nepal. IDS (ed.), *Foreign Aid and Development in Nepal.* Kathmandu: Integrated Development Systems, pp. 219-249.

Shrestha, B.R. (1990): *Managing External Assistance in Nepal.* Kathmandu: Jamuna Shrestha, 128p.

Stone, L. (1989): Cultural crossroads of community participation in development: A case from Nepal. *Human Organization,* 48(3), pp. 206-213.

鈴木美岐子 (1997)：「少数言語の衰退と維持運動：ネパール・カトマンドゥ盆地のネワールの事例から」『国際研究論集』（八千代国際大学紀要）9(4)，pp. 110-127.

Thapa, D. (1993): Sleuth, monk and consultant. *Himal*, 6(4), pp. 24-25.

ヴォーゲル，エズラ・F.著，渡辺利夫訳 (1993)『アジア四小龍：いかにして今日を築いたか』東京：中央公論社（中公新書），205p.

Wagle, N. (1994): Dor Bahadur Bista. *Attitudes* (Kathmandu), 1(1), pp. 47-50.

ウェーバー，マックス著，阿部行蔵訳 (1965)：「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の〈精神〉」マックス・ウェーバー著，阿部行蔵ほか訳『ウェーバー政治・経済論集』（世界の大思想23）東京：河出書房新社，pp. 117-235.

Whittaker, W. (1984): Migration and agrarian change in Garhwal District, Uttar Pradesh. T.P. Bayliss-Smith and S. Wanmali (eds.), *Understanding Green Revolutions.* Cambridge: Cambridge University Press, pp. 109-135.

Wildavsky, A. (1972): Why planning fails in Nepal. *Administrative Science Quaterly,* 17(4), pp. 508-528.

World Bank (1992): *Public Resource Management in a Resource-Scarce Economy (Nepal).* World Bank (Report No. 10324-NEP), 197p.

Zivetz, L. (1992): *Private Enterprise and the State in Modern Nepal.* Delhi: Oxford University Press, 248p.